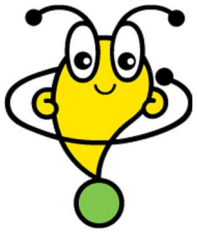
第 260 号



館長だより

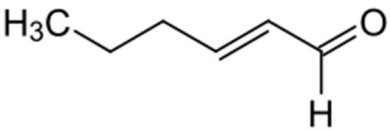
山形県産業科学館

令和７年７月２０日(日)

発行 館長　加 藤 智 一

ナガメ(菜亀)

今年始めた家庭菜園では、大根に挑戦してみようということで、種を買って、植えたわけです。手頃な大きさになったところで、間引きをして味噌汁の具に。ト!ここまでは良かったのですが、ここにきて害虫の被害に苦しんでおります。ヤツの名はナガメ（菜亀)。その名の通り、「菜の花につく亀虫」の意味で、アブラナ科の植物に集まることから名づけられた、カメムシ目カメムシ科の昆虫です。特徴は、6.5㎜から 9.5㎜の大きさで、橙地に黒の紋があります。幼虫・成虫ともにアブラナ科の植物を食草とし、セイヨウアブラナ、ダイコン、キャベツ、カブ、ノザワナ、ハクサイ、コマツナのような野菜や、タネツケバナ、ナズナ、グンバイナズナ、イヌガラシ、タガラシ（キンポウゲ科）のような様々な野草を含むらしい。また、特有の臭気、(主成分はトランス-2-ヘキセナール※)を放ち、幼虫にとって天敵となりうるアリを忌避させるそうです。それだけでなく、幼虫はこれを仲間に対する警告と集合という反対のフェロモンとして利用しているとのこと。すなわち、危険が迫ると大量の臭気を出し、それを感知した他の個体はその場から落下するか逃げ散るという訳です。ヤツが来ると、葉に、小さな白い班が生じ、数が多いとしおれて枯れてしまうらしいのですが、ごく一般的なカメムシ(クサギカメムシやアオクサカメムシ)に比べて、作物に多大な被害を及ぼすほど大発生することもないそうなので、今のところ、見つけ次第手で捕まえて捕殺する程度にとどめておきましょう。



※トランス-2-ヘキセナール（trans-2-hexenal）は、脂肪族アルデヒドの一種で、異性体のシス-3-ヘキセナールとともに青葉アルデヒドの別名を持ち、草や葉のにおいの主要な成分です。天然にはキュウリやトマト、キャベツなどの野菜類、リンゴやバナナ、イチゴなどの果物、茶葉などに存在します。

人に対するシャチのナゾな行動「これ、あげる」

江南タイムズより

ネットで見つけた興味深い記事です。海でシャチを観察していた研究者の前に、1 頭の若いメスが海鳥を吐き出して差し出すような仕草を見せました。まるで「これ、あげる」とでも言うように。そんな不思議な行動、実は世界各地のシャチで相次いで確認されているのだとか。米 CNN によると、この出来事を目撃したのはカナダの海洋生物研究機関ベイ・セトロジーに所属する研究員、ジャレッド・タワーズ氏です。ある日 2 頭のシャチを観察していた彼の前に、若いメスの個体が急に海鳥を吐き出し、水面に浮かべました。シャチはその後しばらく様子をうかがうようにじっとしていたが、カメラに向かって体を回転させた後、その鳥を再び飲み込んだといいます。その数年後には、別のシャチが人間にアザラシの子どもを渡そうとするような行動も観察されました。これらの事例を分析するため、タワーズ氏は国際的な研究チームと協力して過去 20 年間のデータを集めました。その結果、2004 年から 2024 年までの間に、シャチが人間に「獲物」を差し出したとされる事例は 34 件。北太平洋、南太平洋、大西洋、ノルウェー沖など、世界中の海域で確認され、成体・幼体を問わず幅広い年齢の個体で見られたそうです。餌を渡した状況もさまざまで、船の上にいる人間に対しては 21 件、水中では 11 件、沿岸付近では 2 件。差し出された「獲物」も、魚類、哺乳類、無脊椎動物、鳥類、爬虫類、海藻まで幅広く、種類は 17 種に及んでします。興味深いのは、シャチの 97 ％ が人間の反応を数秒間じっと観察していた点です。受け取らなければ再び餌を差し出すか、餌をくわえたまま去っていったといいます。また一部は他のシャチと分け合う様子も見せました。

ペットとして飼われている猫や犬が、獲物を飼い主にプレゼントする行動は広く知られていますが、野生の捕食動物が人間に対して同様の行動をとるのは極めて珍しいとのこと。研究チームは、これはシャチにとって一種の「社会的交流」の可能性があると指摘しています。またタワーズ氏は「シャチ同士でも食べ物を分け合うことがある。それが人間にも向けられているとすれば、彼らが私たちと関係を築こうとしている証かもしれない」と語っています。